

【巻 頭 言】

猿田正機先生のご退職によせて

中京大学経営学部長 梅 田 守 彦

猿田正機先生は、1979年に中京大学商学部にご着任されて以来、まずは商学部にて12年間、ついで商学部から分離独立した経営学部に移籍されて23年間と、今日までの35年間の長きにわたって中京大学の教育・研究にご尽力くださいました。

猿田先生は地元の巨大企業であるトヨタのご研究でそのご高名を広く知られています。トヨタおよびグループ企業が、下請け企業を巻き込んでのいわば地域ぐるみで生産活動を展開しているそのすぐ隣の名古屋の地で、トヨタの国際競争力の源が「長時間」「過密」「不規則」労働を課することができるような卓越した（もちろん会社側からみて）労務管理にあると喝破することはとても勇気のいることです。調査研究上の有形無形のさまざまな制約も数多くあったことでしょう。しかし、さまざまなご苦勞を乗り越えて、海外からも注目される大きな業績にまとめ上げられたのは、猿田先生の真摯に研究に向かわれるお姿が、持ち前の明るさと人懐っこさと相まって、企業城下町にあってともすれば口をつぐみがちな関係者からも貴重な情報を提供していただけたようになったゆえとうかがっております。

猿田先生は、厳しい国際競争の中にあって労働の負荷が限界にきている事実を、きめ細やかな調査にもとづいて明らかにするとともに、大学内外から——たとえば愛知労働問題研究所でのご活動などをとおして——その被害者を支援し、新しい労働のルール作りに向けて精力的に取り組んでこられました。強きものに阿ることなくご自身の信念に基づいて研究を進められる猿田先生のもとには、国の内外からさまざまな方々が訪れてきました。私の研究室の斜め前の猿田先生のお部屋に、外国のテレビ・クルーが取材にきてカメラを回しているところを覗き見たときなどは、同じ職場にすごい先生がおられるのだなあという誇らしい気持ちになったりしたものです。

このような書き方をすれば、なんだか厳しくていかつい研究者の姿が思い浮かぶかもしれませんが、けっしてそうではなくて普段は学生たちにとっても優しい暖かな先生です。猿田先生、そして猿田ゼミの皆さんは、中京大学ないし経営学部としての卒業パーティーが開催されていないため卒業生が寂しい思いをして大学を巣立っていくのではないかと心配して、その労をすべて引き受けて経営学部の卒業パーティーをゼミ主催で設けてくださいました。また、学部内の親睦を図るため、ゼミ対抗の球技大会を運営してくださったのも猿田先生のゼミです。お昼休みや授業時間終了後には、先生を先頭に食事や喫茶店に向かう猿田ゼミの皆さんの姿をしばしば見かけたものです。

大学内にあっては、中京大学がその面目を一新して充実期を迎えた1997年・98年度に経営学部長をしてご活躍されました。また、経営学研究科長、そして全学の教務委員長などの要職も歴任しておられます。さらには中京大学附置企業研究所の所長として、同研究所の資料の充実整備を進めてくださいました。くわえて、中京大学教職員組合の重鎮としての存在感はとても大きなものがありました。

猿田先生、長い間お疲れさまでした。そして、本当にありがとうございました。今後とも私も経営学部のスタッフに対しましてご指導くださいますれば幸いに存じます。